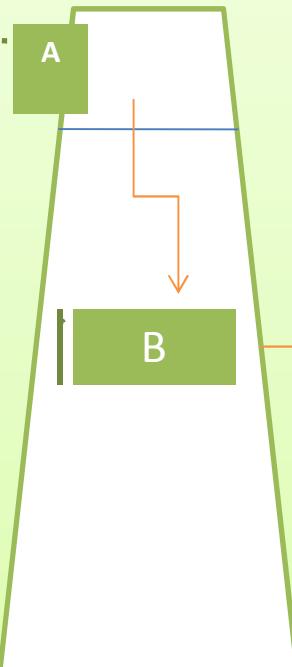


## 《日本的精神主義構圖》

A→B→C" = C2 (西歐概念の後楯化現象)

◎C2:後楯・護符(西歐概念=上位概念)

OC"  
絶對的自己肯定



「進歩・自由」(西歐的概念・新漢語)への適應異常…教育・西歐自然主義文學・戀愛等に對してと同一的「適應異常」現象と言ふ事では。そして、その原因として擧げられる事は以下の日本人の精神構造の特質である。

\* 彼我の差を辨へず「自他未分の神道的生活態度で何にでもべたべた引つ付く」。それが禍し、實證精神によつての「次頁右圖」化(「神に型どれる人間の概念の探究」)が叶はず、「左圖」に停留してしまふ。その結果「西歐的概念」は、「絶對的自己肯定」の爲の肯定因、即ち「C2:護符・後楯」としての上位概念(世界・社會・階級、大思想)へと變質しまふ。以下參照。(參照:左圖及び次頁「彼我の差」)

[拙發表文:『日本の知識階級』より抜粋]

恒存は、「日本の知識階級は言はば絶對的自己肯定者(C"自己主人公化)として終始してきた」と看破し、「私小説家・近代日本知識人、その典型としての清水幾太郎」の三者を、いずれもパターンは左圖の「日本精神主義構圖」だと言つてゐる。即ち以下の様に。

「現實(A)的不滿⇒B:逃げ處としての個人的自我概念⇒C"自己主人公化(自己完成:絶對的自己肯定)↔「詩神・護符・後ろ楯の思想:C2」⇒自己満足・自己正當化(似非生き甲斐・似非實在感)」(參照:左圖)

そして、彼等「絶對的自己肯定者はあらゆるものを自己の手中に收めようとして(權力慾)、その結果、自己の不満(A:現實的不満)を處理する能力だけを失つた人間である。(中略)不満の原因是現實といふ客觀的對象のうちにのみあるのではないのに、彼等はそれをそこ(A的不満)にのみ見出さうとする。いや、さうする以外に能力も無く、方法も知らぬのであります」(『日本の知識階級』全5P369)。と、上記三者を當該評論で鋭く指摘してゐるのである。

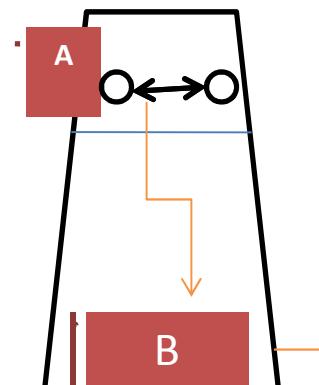
そして彼等は「絶對的自己肯定」の爲に、その肯定因として「C2:護符・後楯」を上位概念「世界・社會・階級、大思想」に求めようとする。何故ならば、西歐近代が否定因としての神を背景に持つに對して、前近代日本はそれを持たない。故に後楯による自己欺瞞が可能になるのである、と恒存は指摘するのである。

## 《日本的精神主義構圖》

$A \rightarrow B \rightarrow C'' = C_2$  (西歐概念の後楯化現象)

◎C2表象: 後楯・護符(西歐概念 = 上位概念)…國家に代はつて「社會・階級・民主主義・平和」・ナショナリズム(國家主義)

絶對的自己肯定  
OC”



[表象の概念(左圖:日本)と、客體化による概念(下圖:西歐近代)との違ひ](『民衆の心』より)…下圖(西歐近代化)には「自己の必然と化する」がある。

\* 何故日本は「自由或は資本主義化・民主主義化・個人主義化」を選択するのか。西歐が近代でそれら概念に客體化して見せた「神に型どれる人間の概念の探究」を、日本も「形ある『物』として(それら新漢語の裏に)見せる」と言ふ事が「So called」なのである。

### A的(現實的)客體化:

「A客體  $\leftrightarrow$  A”主體」  
即ち、「神に型どれる人間の概念の探究」として齎されたもの…資本主義・民主主義・個人主義・自由主義等各種近代概念。ナショナリズム(國家主義)も然り。(現代國家論:P166上)

精神の政治學ラインの最下降化

